

部 長	近藤 健一
研究主任	大槻 直矢
部 員 数	8名

1 研究主題

子どもたちの関わり合いを重視し、基礎基本の定着を図った書の指導

2 はじめに

書の授業においても生徒たちが「興味をもって学ぶ」「自ら課題を見つけ、問題解決にあたる」という面を学び合いの理念の中で、より意識して学習に取り組めるよう研究主題を定めた。今までの教育研究会でも「風車の隊形」による書写のグループ活動の取り入れや、相互評価の時間などの実践を行い、一定の研究結果が出てきていた。今年度もいままでの実践結果を踏まえながらも新型コロナウイルス感染防止という側面も念頭に置きながらの授業研究となった。

3 研究経過

- 4月 研究主題・研究組織の決定・年間計画
- 5月 実践計画
- 6月 実践交流1
- 7月 実践交流2
- 9月 実践交流3
- 10月 実践交流4
- 1月 実践交流5
- 2月 本年度のまとめ

4 研究の概要

担当学年が多岐にわたる部員が事例研究を行う中で、共通して取り入れる実践を決めて取り組みを行った。

(1) 基礎基本の習熟

小学校低学年において、文字を書くための基礎基本を押さえることは重要である。わかりやすいように、合言葉を使うなどしながら正しい姿勢や鉛筆の持ち方を示し、お互いに確認し合うことによって、より意識が高まると言える。また、書くときの力の入れ具合が難しい低学年の子どもたちにとって、「はらい」や「むすび」などの運筆練習は有効である。また、小学校で字形に関する意識を終わらせるのではなく、中学校の家庭学習や国語の時間を利用して、筆ペンを使ったなぞり書きのプリントをやるなど、より段階を上げて継続的に学習に取り組みも必要である。

(2) 相互評価

相互批評を通して、自分では気づくことができなかつた手本との違いや自分の字の良さに気づくことができた。そこで、グループ活動から個に戻し、実際に書く前にどこの部分を意識して書くのかを手本に記入させた。また、タブレットを使って作品を写真に撮り、記録を残すことで、最初に自分が書いた作品からの変化や、周りの生徒との作品の共有などに活かすことができた。

(3) 気をつけるポイントを意識して書く

自分で決めた気をつけるポイントを意識して、実際に書く活動を取り入れた。課題で提示されているポイントの他にも「自分が上手に書きたい」と思う箇所を本時の目標に挙げさせることで課題の到達点が生徒自身にわかりやすくなったように思う。また、教員の評価もそれに合わせたものになってくるので、作品に対する評価やアドバイスもより個々の生徒にあったものになった。

(4) 書の授業の多様化

硬筆の書き写しや、書写の時間が「書の授業」の大半を占めるが、筆ペンを使つての短歌作成を行ったり、筆絵と共に添える文字を書いたりなど筆そのものに触れる時間を増やしていく。また、書の教科書にあるような、書道の文化について学ぶような授業のありかたも「書の授業」だと改めて考えていく。

(5) 全体を通して

今回の取り組みの結果、授業に対する全員参加は可能になった。そして付箋を色分けするなどして、より多くの生徒同士がかかわりあう授業を実現することができた。しかし、生徒の感覚の関わり合いになるため、授業の中で、押さえておきたいポイントを教師と生徒、両方がもち、指導することで、より効果的に力を高めることができると思う。

5 今後の課題

生徒同士の関わりを大切にしてきた書の授業。しかし、取り組むにあたり課題も見えてきた。その1つが、「時間をいかに確保するか」である。話し合いの時間を持つほど、実際に書く時間が短くなる。字を上達させるには反復練習が必要という声もある。そして、もちろん教師からの技術指導も必要である。これらを1単元の構成時間内にバランスよく行うのは、一時間の計画をじっくりと練り考えていく必要がある。

また、継続した書の学習というものが小学校から中学校へと学年が上がっていくにつれて機会が減っていくという現状がある。書の技術や書に対する興味、苦手意識などは小学校までで完結してしまい、その状態のまま中学校の書写の授業に臨むことになる。そういった現状を変えるためにも、より筆に触れる機会や書の授業を計画的に確保していかなければならない。

